合い言葉はミディアム・スローライフ。 せき再発見フリーマガジン「ぶうめらん」

ぶうめらん

VOUSMELAN
無料 83
JUNE 2022
隔月刊｜21,000部発行

行こう、自然のお家。

セキのお宝キャンプ場を まるごとチェック！

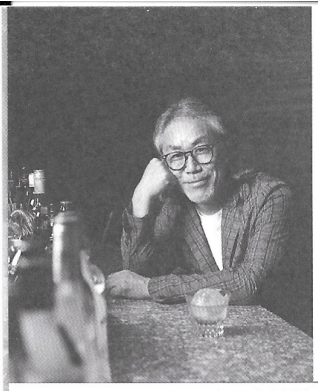
読まなかんよ、
えか

撮影地：すぎのこキャンプ場スイス村

小学生、中学生のみんなへ
おうちの方に渡して、みんなで読んでね！

関市PTA連合会の通信入ってます。

鬼ムズ！ヒントは足もと！
ぶうをさがせ
特集ページ内にも２体おるよ



▲筆者近影

栗山 圭介の まえたろかっ！

まえたろか・・・関弁で『仲間に入れてあげようか』の意味

「悪いことした奴に謝らせんのは、
人として当然のことですやん」
謝罪マスターと呼ばれる男は、
記者会見で自らも深く首を垂れ、
誰かの人生をリスタートさせる。
大阪生まれの吉本育ち。
おもろいおっさんの話です。

第75回 『謝罪マスター、世直し日記』

吉本興業で専務を務めた友人は、さらにその上のポストを嘱望されたが、会社を辞め、ニューヨークのハーレムに移り住んだ。聞けば、「どんな経歴を持っていたとか、金持ちだとか、まるで関係ない環境に身を置いてみたかった」らしい。「ハーレムって響きもゾクゾクするし」とは、さすが吉本の強者である。

この男、帰国後にまたしても驚くべきことに足を踏み入れるのだが、まずは、その人となりを。

〝この男〟こと竹中功。同志社大学法学部出身のインテリにして、超おもろいおっさん。大学卒業時に、「歩いて通える芸能界」への就職を希望し、吉本興業へ入社。数多のお笑い芸人を輩出したNSCを立ち上げ、機関誌『マンスリーよしもと』を刊行、初代編集長に就き、映画『ナビィの恋』『無問題』をプロデュースするなど、獅子奮迅の活躍で、巨城吉本興業を支える要人となった。ダウンタウンの浜ちゃんを面接し、その脇で恥ずかしそうにこちらを窺っていた松ちゃんもろとも、「合格！」と言ったのはこの人である。

特筆すべきは、業界の『謝罪マスター』と呼ばれたことだ。数々の芸人のスキャンダルに際し、マスコミを集めては謝罪会見を開き、芸人とともに頭を垂れた。容赦ない質問をすべて受け付け、ときには芸人を口籠もらせることも。その立ち位置は、芸人寄りでもマスコミ寄りでもなく、ごく一般的な良識を持つ、世論の代表者でもあった。

「いつも笑うてくれてる人たちを不快にしたんやから、頭下げるのが筋やろ。なんでも芸の肥やしで済む時代とちゃうねんから」

厳しい。だが、その先がある。

「女遊びや裏ガネや、そんなん悪いに決まってる。世間様をお騒がせして仕事干されたら、そこからが芸の肥やしや。辛い時期の踏ん張りは、華やいでいた頃より尊いものになるからな。もういっぺん輝くためには、どないすればええか。そのために、真っ先にすることが、心の底からの謝罪や。世間様や会社に対してだけやない、なにより自分自身に。後悔して過去に指くわえるだけなら誰でもできる。逆境から這い上がってこられるのが真の芸人なんや」

そんな竹中が選んだ仕事は、意外なものだった。

吉本興業時代、「住みます芸人プロジェクト」として芸人と共に暮らした東北で、刑務所などの矯正施設へ慰問をすることに。ある刑務所への慰問で、頼みの芸人がビビって持ち時間90分のうち15分しか持たず、竹中が登壇となった。そこで竹中は、これまで自分が追い求めていたものの欠片を掴んだ。

「言葉のキャッチボールが心のキャッチボールに変わり、良き人間関係が形成されていくことを実感した」

目の前にいるのは受刑者である。芸人のように謝罪会見を開くというレベルではない。しかし、竹中は謝罪の本質をより深く感じた。

「謝罪は、謝れば済むということやない。いちばんええのは、謝らんでもええ人生を送ることに決まってる。そやけど、人間は、魔が差したり、心が荒んだり、自暴自棄になって罪を犯すことがある。芸人には慢心もな。そしたら、自分を戒めることや。けれど、人生を捨てたらあかん。取り返しのつかない過去を胸に刻みながら、それでも希望を見つけて生きていく。生易しいことやないけど、刑務所の中で精一杯社会貢献することが、謝罪であり償いなんや」

その竹中から刑務所の慰問に同行するよう誘われた。はじめて足を踏み入れたそこは、実に規律正しい、まさに矯正施設と呼ぶに相違ない場所だった。

受刑者の心を和ませ、泣かせ、希望を宿らせる竹中は、いやはや凄かった。そもそも芸人というのは、芸事を成す者を指す。竹中の話には、心を閉ざした者の、心の扉を開ける力がある。巧みな話術は演芸のそれで、人間の真髄へと辿っていく。だから人は、受刑者は、刑務官は、かくいう私も、涙する。その涙は、とてつもなく温かく、かつ残酷だ。

「先生、私、こんな処にいる自分が情けないです」

「ほな、早よここ出て、もっとええ人生送らなあかんで」

ふと漏れ聞こえてきた会話に心が震える。そこには人間同士の会話があった。

ある刑務所に、竹中の慰問を心待ちにしている受刑者がいる。慰問日が近づくにつれ、刑務官の許可を得て率先して準備をし、許されるかぎりの仕事をする。そして自分への褒美のように、竹中との僅かな時間の中で言葉を交わす。

「ええ男やで。でも犯罪者や。それでも人生は続く。僕の言うてることは希望だけやない。希望は、後悔や償いとともにあるものやから。希望を持ちながら、戒めも深めていかなあかんのや」

愛情、厳しさ、希望……竹中の言葉から溢れるものを浴び、彼らはそれぞれの今日を生きていく。それが僕にとっても、かけがえのない講話であったことは言うまでもない。

「手伝ってくれる受刑者やけどな、彼、無期懲役やで」

彼にとっては、竹中の訪問が、何よりの希望に違いない。

くりやま けいすけ

クリエイティブディレクター。有限会社マロンブランド代表。雑誌、広告、舞台構成・演出、イベント制作など多岐に活躍。しんきんクレジットサービス会報誌『はれ予報』では毎回大物ゲストとBarで対談する「止まり木でもう一杯」を連載中。著書に『居酒屋ふじ』『国士舘物語』、『フリーランスぶるーす』（すべて講談社）、最新作は『ヒールをぬいでラーメンを』（角川春樹事務所）。ドラマ化された『居酒屋ふじ』、DVDBOX好評発売中！　毎週月曜23時～FMわっち『栗山圭介のRadio GLIP』放送中！
new! ≫7月4日(月)24時～ ミュージックバード「あのグラ深夜族　～オトナの放課後24時～」

伝説の店の伝説のおやじを描いたデビュー作『居酒屋ふじ』、国士舘大学の4年間を描いた体育会系青春小説『国士舘物語』、90年代の広告・雑誌業界を舞台にした半自伝的小説『フリーランスぶるーす』、最新作『ヒールをぬいでラーメンを』全国書店にて絶賛発売中

18歳までに、ふるさとに恋しよう！
一般社団法人GLIP
問い合わせ先 glipclip@gmail.com

本稿は竹中先生ご提供のもと、発行元に許諾を得て掲載しております。
無断転載は、固くお断りいたします。（近老協事務局）